



書 評

小児の超音波ガイド下血管穿刺と
区域麻酔

竹下 淳・著



究める、とは

何事も究めることが大事だ。そう言ったのは誰だったか、るろうに剣心か、宮本武蔵か、王貞治か？

医療も、究める人がいる。もちろん究めなくとも医療はできる。しかし究めることで、より良い医療ができるに違いない。竹下淳は、その、究めた人のひとりだろう。

しかし医師の 90% 以上は、竹下淳の究みのすごさが理解できないかもしれない。それほどにニッチな世界であるからだ。そう、あまりにニッチすぎる。

血管路確保が、“トライアル”であり、“何時間もかけて挑むもの”であった時代がある。少なくとも書評子の若いころはそうであった。ある意味牧歌的であり、またある意味では非効率な、侵襲的な時代であった。

この領域に血管エコーが導入されたのは 2000 年に入ったころだと思う。それまでの常識が翻る、小児集中治療領域では数少ないイノベーション。おかげで診療は改善し、関連した研究すらもできるようになった。しかしこれを見事なまでに自分のものとして利活用し、数えきれないくらい多くの原著論文を残し、ひいてはこの成書の出版レベルにまで究め尽くしてくれたのは、竹下淳だ

けであった。

残念ながら今でも多くの医師の実践は、エコーガイド下ブラインド穿刺に止まっている。器械があるだけではダメで、それを使いこなせる知識やスキルと、それを教えてくれる指南書がなければ、ネコに小判、サルにスマホなのだ。

誰もが究められるわけではない。誰もがドジャースタジアムでホームランは打てない。そのことは分かったうえで、究めた者から真摯に学ぶことが大切だ。常に上を見ること。そのための指南書として本書は最適であり、小児の急性期患者を取り扱うすべての医療従事者が、一度は見ておく（何度も見てみる）べき成書であることは間違いないだろう。

～求道すでに道である～

宮澤賢治

(広島大学大学院医系科学研究科救急集中治療医学
志馬 伸朗)

A5 判, 137 頁

2024 年 11 月, 5,060 円+税
克誠堂出版

